

カント読書会 3日目 2005/08/18 担当：大久保歩  
イマヌエル・カント、『純粹理性批判』上巻（原佑訳、平凡社ライブラリー、2005年）  
[ ]は発表者による補足を、「 」 「 」は因果関係を示す。

## 経験の類推 B. 第2の類推 原因性の法則にしたがう時間継続の原則<sup>1</sup> 398-424（原書第2版 S.232-256）

[テーゼ]

すべての変化は原因と結果の連結の法則にしたがって生起する。<sup>2</sup>

証明

1. 時間継続のすべての現象：ことごとく変化。すなわち、現に持続している実体の諸規定の継続的な存在と非存在（≠ 実体自身の発生ないし消失）。変化の連続性の法則

1 2. 諸現象がたがいに引きつづいて生ずる：時間における二つの知覚[AとB]<sup>3</sup>を連結する（ Bという状態を知覚するためにはAというBとは異なる現象が先行しなければ不可能だから 空虚な時間に後続する現実性というのは把捉されえないか）

3. 連結：構想力のある総合的能力の産物。構想力が内的感官を時間関係に即して規定する。

2+3 4. 二つの状態[=知覚]: AあるいはBが時間において先行するというように、二つの様式で結合することができる。（例：家屋を把捉する場合） 時間はそれ自体そのものでは知覚されえず、だから時間との連関において、いわば経験的に、先行するものと後続するものとが客観に即して規定されることもありえないから。

5. 客観的關係が規定されたものとして認識される：二つの状態のあいだの關係が、必然的なものとして（= AとBのいずれが先に定立され、いずれが後に定立されなければならないということ、またその逆に定立されてはならないということ）規定されるように、思考されること。

6. 総合的統一の必然性をおびている概念：純粹悟性概念だけしかありえない。この場合は原因と結果の關係の概念（= 原因が結果を時間において後続するものとして規定する）。

7. 純粹悟性概念：知覚のうちにはない。

2+3+5+6+7 ・諸現象の継続を、したがってすべての変化を原因性の法則にしたがわせること：経験を、すなわち、諸現象についての経験的認識を可能にする

<sup>1</sup>第1版では「産出の原則」となっている。

<sup>2</sup>第1版では次のとおり。「生起する（存在することを始める）すべてのものは、そのものが一つの規則にしたがってそれに引きつづいて生ずるあるものを前提する。」

<sup>3</sup>叙述を分かりやすくするために、二つの知覚を仮にAとBと置き、以後の叙述もそれにあわせて書き換える。